

平成 21 年 5 月 20 日現在

研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2007～2008  
 課題番号：19530689  
 研究課題名（和文） 女性教師のライフコースに関する事例的質的調査研究  
 研究課題名（英文） A case qualitative surveillance Study about a female Teacher's life-course  
 研究代表者  
 山崎準二(YAMAZAKI JUNJI)  
 東京学芸大学・教員養成カリキュラム開発研究センター・教授  
 研究者番号：50144051

研究成果の概要：女性教師たちのライフコースから導き出されるのは、日常の教職生活に内在し、教師たちの発達を支え促していく機能（＝インフォーマルな性格を持つ「発達サポート機能」）の存在の大きさである。勤務校における子どもたち（特に様々な問題を抱え個別対応が求められる子どもたち）との出会いと格闘、その経験過程で得られる先輩教師たちからの援助や助言、あるいは自らの子どもの出産・育児といった私的経験までもが、教師としての力量形成に大きな影響を与え、教師としての発達を支え促す機能を発揮しているのである。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：教育学

科研費の分科・細目：教育学

キーワード：女性教師、ライフコース、事例的研究、質的研究

## 1. 研究開始当初の背景

教師は、自らの専門的な力量を生涯にわたって自己形成し、教育専門家としての発達を遂げていく。このことは、数多くの教師たちの経験が物語っている事実である。とりわけ、授業を担う実践的な指導力量は、教職に就いて以降の現職教育段階で、赴任した学校の中で数多く

の授業実践を遂行し、教師の同僚間の経験交流や集団的な授業研究の取り組みの過程で、次第に獲得されていくのである。

本研究は、申請者（山崎）がこれまでに取り組んできた「教師のライフコース研究」の手法（とくにインタビュー調査を中心とした教師個々人のライフコースの事例的質的分

析)と成果を生かし・踏まえながら、様々な特徴と課題を抱える女性教師に焦点を当て、彼女らの「教師としての発達と力量形成」のプロセスを明らかにしつつ、男性教師も含めた教師全体の発達・力量形成サポートシステム構築に向けた基礎的データの収集・蓄積・提供が残された課題としてあった。

また本研究は、女性教師に焦点を当てることによって「教師としての発達と力量形成」問題における、女性教師固有の問題の析出にまず取り組もうと意図した。

## 2. 研究の目的

今回の申請研究は、女性教師に焦点を当てることによって「教師としての発達と力量形成」問題における、女性教師固有の問題の析出にまず取り組もうとするものであった。

- (1) 申請者(山崎)がこれまで取り組んできた一連の「教師のライフコース研究」においては、各年齢段階において女性教師の離職者は男性教師を上回って存在しており、その理由も年齢段階ごとに異なっている。すなわち、20歳代においては職場の中で校務分掌上の位置付けが弱く相談相手も得にくいこと、30歳代においては出産・家事・育児に多くの時間とエネルギーを要し身体的精神的疲労度が大きいこと、40～50歳代では育児から一定程度解放されるが今度は老親等家族の介護問題に直面することなどであり、全体として家庭生活面での様々な問題を抜きにして女性教師の資質能力の向上問題、教師としての発達や力量形成の問題を語るができない。それらは、女性教師の視点から、男性教師も含み込んだ教師全体における、現在の家庭や職場のあり方、教職生活のあり方自体を逆照射し、問い直すことにもつながっていく。

しかし、女性教師の発達や力量形成にとって、家庭生活面での経験をマイナス要因としてばかり受け止めてはならない。例えば、自らの出産・育児の経験は、子どもをとらえる眼やその背後にいる保護者の思いに対する理解を深め、その後の教育活動の質を細やかに転換させていくことを、申請者(山崎)がこれまで実施してきたアンケート調査やインタビュー調査の結果事実が物語っている。

- (2) 研究期間内に行うべきもう一つの目的テーマとして、ライフコース研究をはじめとする質的調査研究の方法論を整理・検討することがあった。これまで申請者が取り組んできた「ライフコース研究」は、従来の「ライフサイクル研究」「ライフヒストリー研究」「オーラルヒストリー研究」が蓄積してきた成果を引き継ぎながら、かつそれらの弱点を克服する問題意識の下に取り組まれてきた研究である。しかし、現在では、さらに「ライフストーリー研究」「ナラティブ研究」など、用語の多様化に象徴されるように、研究方法論も多様化複雑化錯綜化してきている。今回の申請研究は新しい研究方法論上の論議を踏まえながら、ライフコース理論等の整理・検討を行っていくことも目指した。

## 3. 研究の方法

年齢及び経歴の点で多様な対象者に対してインタビュー調査等を実施し、その集中的な事例的質的分析を行っていく。

申請者(山崎)はこれまで主に国立教員養成系学部の卒業生を対象として、継続的なアンケート調査及びインタビュー調査を実施してきた。本申請研究では、国公私立一般大学・学部出身者や、教職を離職した者、民間企業等他職種経験後に教職の道に入って

きた者等にまで調査対象をさらに広げ、調査・分析を実施する。

彼女らの教師としてのライフコースを、第二次世界大戦後日本の社会史・教育史（とくに女性教師たちのおかれてきた歴史）の舞台上に位置づけるとともに、「世代」や「ジェンダー」という視点、職業時間上の経験のみならず個人時間・家族時間・歴史時間上の諸経験がいかに関係としての発達や力量形成に影響を与えていくのかという視点、そしてその際に様々な要因の共時化（共振・共鳴）のありようが個人の多様な発達と力量形成を生み出していくという視点等を大切にしながら、調査・分析を行っていく。

#### 4. 研究成果

女性教師の場合、そのライフコース上、教師としての発達と力量形成を支え促す観点・要因として、次のような事柄が重要であることが明らかとなった。併せて今後の課題についても提起していきたい。

##### (1) 「子どもたちとの出会い」の中での力量形成と発達

力量形成を促し、発達の転機を生み出していくのは、なによりも教師自身の日々の教育実践上の経験である。そして「教育実践上の経験」とは、具体的には目の前にいる子どもたちの実態と子どもたちが抱えている困難な課題との格闘である。それが非常に鮮烈に見て取れる事例が、さまざまな問題を抱えた「子どもたちとの出会い」と格闘である。いじめやマスコミ性文化にさらされる子ども、親たちの生活困難の中に巻き込まれる子ども、そして重い障害を負うことになった子ども、教師たちは、そのような子どもたちの現実と向き合い、自らの実践課題としても受け止め、格闘するのである。多くの教師たちは、初めて接する子どもたちの姿に戸惑い、

それまで自分が蓄積してきた指導方法ではもはや対応できない状況に直面し、その中で悩み苦しむ、試行錯誤しながら子どもたちの指導にあたる。教師たちは、長い教職生活において、そのような教職経験を繰り返し続けることを通して、たえず教師としての新たな力量の形成と教師としての発達を生み出していくのである。

多くの女性教師の場合、「子どもたちとの出会い」とは、自らの出産・育児の経験も意味している。自らの出産・育児というような私生活上の経験は、女性の働く環境が未整備な社会状況の中で、しばしば教職生活を困難にし、時として女性教師たち（その多くは30歳代）を離職にまで追い込んでいく。しかし、そのような教職生活上の危機をものはらんだ出産・育児経験は、子どもという存在を理解する力を豊かにしていくという点で、教師の力量形成と発達を促す大きな要因でもある。

女性教員の割合が、小学校で62.8%、中学校で41.5%までになってきた現在（2008年度時点）、多くの教育関係者の中でそのような視点を共有することが必要である。

##### (2) 職場や地域における「教師集団」の中での力量形成と発達

さまざまな教育実践上の困難な状況の中で、教師たちを支え、励まし、克服に向けての方向を示し、具体的な助言を与えてくれる存在が、学校内外で出会った先輩教師たちである。普段は暖かく見守りながらも困難な場面に陥るとすぐさま助けに入ってくれる職場の先輩教師、目指すべきモデルと感じられる実践を提示し導いてくれる地域の教育研究サークルの先輩教師、彼らは決して指導者というような肩書きをもって立ち表れるのではないが、後輩教師たちの日々の教職生活における心強い支援者として常に寄り添い、支えてくれている存在なのである。とりわけ、

若い教師たちにとっては、実践上のつまづきに直面した際に、それら先輩教師たちの助言が、困難さを打開していくきっかけとなったり、進み行く方向性を示してくれるものとなったりしているのである。

職場において教師たちの力量形成と発達を組織的に促す取り組みとして、学校の共同研究がある。授業研究を中心とした学校全体で一つのテーマの下に取り組む共同研究活動（校内研修）は、1960年代の中頃から次第に盛んになってきたものである。それは、同じ時期から始められた文部省の「研究指定校」制度を背景としているが、県や市町村レベルの指定を受けてのものや、あるいは自らテーマを掲げて取り組んでいるものなどさまざまである。それらの活動は、若い教師たちにとって、共同研究活動を通して先輩教師たちから学び、新しい知識や技能を習得する場となっている。また、中堅教師たちにとっても、それまでの教職生活の中では取り組む機会のなかった研究テーマや課題について新たに学び直す場であり、教師集団のリーダーとしての役割と力量を学びとっていく場となっている。

地域において教師たちの力量形成と発達を組織的に促す取り組みとして、自主的教育研究サークル活動がある。その活動に参加することによって授業実践の力量を獲得していくのである。学校内の共同研究活動がともすると時々の教育政策的なテーマ・課題に傾きがちなことに対して、地域での自主的教育研究サークル活動は、教師一人一人の自由意志と選択によって取り組まれる集団的な研究活動であり、力量形成の重要な場として機能してきている。

### （3）今後の課題

日常の教職生活に内在し、教師たちの発達を支え促していく機能（＝「発達サポート機

能」）の存在が重要である。勤務校における子どもたちとの出会いと格闘、その経験過程で得られる先輩教師たちからの援助や助言、あるいは自分の子どもの出産・育児といった私的経験までもが、教師としての力量形成に大きな影響を与え、教師の発達を促す機能を発揮しているのである。

社会全体の経済的・政治的・文化的な変化の波を受け続け、子どもたちとその保護者たちの生活実態と意識は絶えず変化していく。その絶え間ない変化の過程では、教職キャリアや年齢に関わらず全ての教師たちが、それまで蓄積してきた指導の考え方や方法・技術ではもはや対応できなくなる状況に直面する。この教職の危機ともいえる困難な状況を打開するために、教師はもがき苦しむが、そのもがき苦しむ中から、教師たちは状況打開のための新たな力量を獲得していき、教師としての新たな発達を生み出していくのである。

このような教師としての力量形成と発達を支え促しているのが「発達サポート機能」である。とりわけ職場や地域における日々の教職生活の中で、教職キャリアや年齢に関わらず、自由で平等な立場で、互いに授業を見せ合い、検討し合うこと、そして自らの実践上の悩みや成果を持ち寄り、語り合うこと。このような「発達サポート機能」を最も象徴しているものとしての授業研究活動の存在こそ、日本のすぐれた特徴である。現在、教職生活が多忙化し、職場や地域で授業研究活動にとりくむゆとりが失われてきている傾向にある。一人一人の教師の発達と力量形成を支え促していくためにも、授業研究活動の再活性化と、そのための教職生活上の条件整備が、必要とされている。

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 2 件)

- ① 山崎準二、教師の評価：ライフコース研究の立場から、教育目標・評価学会紀要、第18巻、8-18頁、2008、査読有り
- ② 山崎準二、教師としての力量形成：ライフコース研究の立場から、教育フォーラム：教師という道、金子書房、第40巻、66-79頁、2007、査読無し

[学会発表] (計 1 件)

- ① 山崎準二、教師のライフコース研究の視点から課題と展望を考える、中部教育学会第56回大会シンポジウム、2007. 6. 23、愛知教育大学

[図書] (計 1 件)

- ① 山崎準二、日本における教員研修の課題と展望 (第2章)、東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センター編『東アジアの教師はどう育つか：韓国・中国・台湾と日本の教育実習と教員研修』所収、東京学芸大学出版会、2008、200頁 (104-115頁執筆)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

山崎準二 (YAMAZAKI JUNJI)  
東京学芸大学・教員養成カリキュラム開発研究センター・教授  
研究者番号：50144051

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし

以上